1.　京都産業大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告
～学生主導の語学イベントを通じた学生スタッフの経験と学び～</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">澤井　星輝　京都産業大学　外国語学部　英語学科　イングリッシュキャリア専攻　4 年</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">船山　凌雅　京都産業大学　外国語学部　ヨーロッパ言語学科　ロシア語専攻　3 年
野村　史　京都産業大学　外国語学部　英語学科　イングリッシュキャリア専攻　2 年
出口　結葉　京都産業大学　外国語学部　ヨーロッパ言語学科　スペイン語専攻　2 年
杉江　昌子　京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室　グローバルコモンズ　学習支援担当
林　篤彦　京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室　主任</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>学生スタッフ</td><td>グローバルコモンズ</td></tr>
<tr><td>学生の主体的な学び</td><td>語学イベント</td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は 2021 年 4 月の活動開始以来、語学力向上や留学生との異文化交流を目的とする様々なイベントを学生主導で行ってきた。当初に立ち上げた英語ディスカッションイベントは現在も人気企画となっている。また、ロシア語やスペイン語などの多言語イベントも毎週定期的に開催している。本発表では、この 1 年間の活動に焦点を当て、語学イベント企画・運営の中心にいる学生スタッフ自身が、個々のイベント活動で得た学びや成長について発表する。また、これまでの 3 年間の活動を振り返りながら、活動の実績や変遷、学生スタッフとしてのやりがいや成果、意義について学生目線で共有する。さらに、活動を通して気づいた改善点や今後の目標などについても触れる。この発表を通じて、本大学における学生の主体的な学びの実践例としての我々の取り組みを紹介し、よりよい活動へと発展させるきっかけとしたい。</td></tr>
</table>

2.　京都産業大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">学生ファシリテータの考えから調べる活動意義</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">落合　倫世　京都産業大学　現代社会学部　2 年次</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">久保田　悠　京都産業大学　外国語学部　3 年次
上田　爽心　京都産業大学　法学部　2 年次
大島　和美　京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（F 工房）職員
宮﨑　知美　京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（F 工房）職員
久保　亜希　京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（F 工房）職員</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>学生ファシリテータ</td><td>組織拡大</td></tr>
<tr><td>学びの支援</td><td>成長実感</td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">学生ファシリテータ（以下、学ファシ）は、主に初年次向けの授業などでグループワークの円滑な進行をサポートするボランティアの学生スタッフである。アイスブレイクの進行や受講生同士の話し合いのサポートを通じて学生の主体的な学びを支援している。
過去 2 年間で活動者数は増加し、今期 90 名を超えた。加えて、有志の 4 年次生が職員主導のもとサポーターとして学ファシに向けた研修の企画・運営等の活動をしている。
現在多くの学生が参加しているが、学ファシは活動にどのような魅力を感じているのか。私達は多くの学生に目標があり、何らかの力を得られるという期待があるのではないかと考えた。
そこで、私達は学ファシに対して加入動機や活動のモチベーションから、求めていたものと実際の活動で得たものを調査し、比較する。
本報告では「学ファシ活動でどのような力が身に付くか」を考察し、活動の意義を示す。</td></tr>
</table>

3.　京都華頂大学・華頂短期大学

テーマ	初年次教育における課題と今後の展望 －大学生活スタートブック改訂に向けてー	
発表代表者	根岸　裕子　京都華頂大学　現代家政学部・准教授／教育開発センター・主事	
連名発表者	渡邊　雄一　京都華頂大学　現代家政学部　講師／教育開発センター専任研究員 坂口　みゆき　華頂短期大学　幼児教育学科　准教授／教育開発センター専任研究員 塩田　二三子　京都華頂大学　現代家政学部　教授／教育開発センター専任研究員 髙岡　理恵　華頂短期大学　専攻科介護専攻　教授／教育開発センター専任研究員 松尾　章子　華頂短期大学　総合文化学科　教授／教育開発センターセンター長	
キーワード	初年次教育	教材改訂
	学生のニーズ	社会人基礎力
発表の概要	大学・短期大学への全入時代に突入し、学習意欲の低下や目的意識の希薄化など学生の在り方も多様化している。本学では、大学で求められる主体的な学びに移行するため、2020 年度より本学教員により作成された共通教材の使用による全学的な初年次教育のプログラム「基礎ゼミナール」「総合基礎演習」が展開されている。現在 4 年が経過し、その間にコロナ禍により教育現場の DX が強制的に求められ、大学での学びについて変革が求められるようになった。さらに昨今の社会状況により学生のニーズも変化してきている。そこで、学生と教員双方へのアンケートおよびインタビューにより現況を調査し、課題を共有するとともに、改訂に向けての取り組みおよび今後の展望を報告する。	

4.　京都薬科大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">Excel オンラインを用いた初年次基礎科学実習における実習支援の取り組み</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">金瀬　薫　　京都薬科大学　学生実習支援センター・助教</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">髙尾　郁子　　京都薬科大学　学生実習支援センター・助教
平山　恵津子　京都薬科大学　学生実習支援センター・助教
林　美沙　　京都薬科大学　学生実習支援センター・助教
髙田　哲也　　京都薬科大学　学生実習支援センター・助教
徳山　友紀　　京都薬科大学　学生実習支援センター・助手
木村　徹　　京都薬科大学　学生実習支援センター・准教授
藤原　洋一　　京都薬科大学　学生実習支援センター・教授</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>実験実習</td><td>BYOD</td></tr>
<tr><td>クラウド</td><td>フィードバック</td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">本学では、1 年次生を対象に今後の専門薬学実習に必要となる基礎的な科学実験の知識・技能習得を目的とした基礎科学実習を行っている。新入学生は大学入学までの実験経験が個々に大きく異なり、さらに本実習では受講生（2023 年度 435 名）を約 70 名ずつ 6 グループに分け約 4 名の教員で指導することから、各々の実験状況を把握しフィードバックを行うことは非常に困難であった。近年本学では ICT を活用することで実験データ等を収集し、学生指導に役立てている。そこで、今年度の基礎科学実習では、本学が Bring Your Own Device（BYOD）に移行したことから、学生自身のスマートフォンやパソコンなどからクラウド上の共有 Excel ファイルにアクセスしデータを入力することで実験データの収集を行い、その結果を元にフィードバックを試みた。本発表では、その実施概要と成果について報告する。</td></tr>
</table>

5.　京都文教大学

テーマ	高校生の自己分析と進路選択に寄り添う新たな入試前プログラム「進路探求プログラム」の意義と課題	
発表代表者	野々口　勇人　京都文教大学　アドミッションオフィス　職員	
連名発表者	中西　勝彦　京都文教大学　総合社会学部　助教 井出　大地　京都文教大学　フィールドリサーチオフィス　係長 澤　達大　京都文教大学　総合社会学部　教授／ともいき基盤教育センター長 黒宮　一太　京都文教大学　総合社会学部　准教授／総合社会学科長	
キーワード	総合型選抜選抜	高大接続
	リフレクション	進路選択
発表の概要	本発表では、京都文教大学で行っている「高大接続入試：進路探求方式」のうち「進路探求プログラム（以下、本プログラム）」の概要を紹介し、その意義と今後の課題を報告する。本入試は、総合型選抜に分類される併願制入試であり、高校時代に特定の活動に注力した高校生を対象としている。 本プログラムは入試出願の前段階として実施するプログラムであり、その目的は自身の強みの言語化と自身が大学に進学する意義の明確化である。前者は高校時代に注力した活動を大学生や大学教職員の支援を得ながらリフレクションし、そこで発揮された自身の強みを言語化するワークを行う。後者は大学生との対話を通じて大学での学びの具体的イメージを獲得し、自身が大学に進学する意義を整理する。これらの作業を経て、自身の進路を検討することになる。本プログラム修了後、その成果を他大学の入試に活用することも歓迎している点にユニークさを見出すことができる。	

6.　京都外国語大学・京都外国語短期大学

テーマ	京都外国語大学コミュニティ通訳の取り組みと今後の課題	
発表代表者	佐藤　晶子　　京都外国語大学　外国語学部英米語学科	
連名発表者	河野　弘美　　京都外国語短期大学　キャリア英語科 ラムスデン　多夏子　京都外国語大学外国語学部英米語学科	
キーワード	コミュニティ通訳	多文化共生社会
	公的サービス支援	
発表の概要	言語の障壁があるために行政、司法、医療、教育、社会福祉などの公的サービスを容易に利用できない外国人住民を支援する通訳を「コミュニティ通訳」という。京都外国語大学では、多文化共生社会の一翼を担う人材を育成するために、外国語学部では 2022 年度から「コミュニティ通訳特論 I」（半期）の授業を開始した。本学はこれまで通訳、翻訳を指導してきたが、「コミュニティ通訳」に特化した科目はなかった。2022 年度と 2023 年度は外国語学部の 3、4 年生が履修対象者で授業を進め、現在までに 44 名が本科目を履修している。本発表では「コミュニティ通訳とは何か」を含め、「コミュニティ通訳」を初めて学ぶ学生を対象とした授業の実践報告を行い、学生にとって本科目を履修する利点や教育者にとっての今後の課題を考察する。また、現在は AI を使った言語サポート機器が流行っているが、人間が対面形式で行うコミュニティ通訳の必要性を検討することも行う。	

7.　京都ノートルダム女子大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">授業ツールという観点で見るメタバースの可能性～高大連携授業やオンデマンド授業における実践事例</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">濱中　倫秀　　京都ノートルダム女子大学　社会情報課程　准教授</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">渡邉　詞水　　京都ノートルダム女子大学　現代人間学部　生活環境学科
３年次生
谷川　千夏　　京都ノートルダム女子大学　現代人間学部　こども教育学科
３年次生
尾崎　日沙乃　京都ノートルダム女子大学　社会情報課程　１年次生</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>メタバース</td><td>高大連携授業</td></tr>
<tr><td>VR</td><td></td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">web3.0 の時代を見据え、メタバースの活用が様々なシーンで見られるようになっている。従来のオンラインコミュニケーションツールとの違いは、アバターと呼ばれる自分の分身が仮想空間内で様々なコミュニケーションをする点にある。一方で、プラットフォームも多様化しているため、特徴や用途にあわせてベストな選択をするスキルが必要である。今回の発表では、メタバースサークルの立ち上げ経緯と目的、そして今日に至るまでの授業その他の実践例を紹介する。また、特に高大連携授業をはじめとする事例と今後の可能性も考察したい。</td></tr>
</table>

8.　大谷大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">ハイブリッド授業（オンライン＆教室）とワークショップ型授業の試み
―zoom とボランティア講師を体験して―</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">筒井　洋一　　大谷大学　非常勤講師</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">水野　有紀　　ノートルダム女学院中学高等学校　教諭</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>ハイブリッド授業</td><td>ワークショップ型授業</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">学びの姿は、教室内にとどまらない。その一方で、教室では学生と教師の双方向授業をおこなっていても、オンライン授業になると教師から学生への一方向になってしまっている現状もある。今回、アフリカ・モーリシャス滞在中のボランティアが授業（15 週）に関わってくれることで、ワークショップ型のハイブリッド授業を展開した。
技術的には、教師は、PC 一台にマイクとカメラを接続することで、オンラインを含めた双方向授業が可能になった。この仕組みに基づいて、水野は、アフリカから、教室内で授業をするのと変わらない中で、双方向のやりとりをおこなったが、一人の教師が教えるのではなく、チームとして取り組んだ授業ボランティアが連携しながら授業を進行していった。
このように授業を複数で進行させることで、教室に完結しない新しい学びが生まれたのである。</td></tr>
</table>

9.　京都女子大学

テーマ	司書課程の学びを活かしたローカルウィキペディア記事の執筆 －主体的に選択し、客観的に記述する－	
発表代表者	桂　まに子　　京都女子大学　図書館司書課程　講師	
連名発表者		
キーワード	オープンデータ	情報リテラシー
	ローカルウィキペディア	地域づくり
発表の概要	本学の司書課程では、学生たちが身近な地域（京都市東山）について主体的に学び、その成果をデジタルな形（Wikipedia、OpenStreetMap）で地域や社会に還元するオープンデータソンを教育の中に取り入れている。コロナ禍や昨今の自然災害を経験した学生たちは、失ってからでは手遅れになる「地域の今」を記録することの意義を理解し、自分ごととして何ができるのか考えるようになった。 本発表では、学生自身が選んだ「地元では有名なのに Wikipedia に記事がない」ものを中心に、司書課程で学んだリサーチスキルを駆使しながら情報収集およびローカル記事を新規執筆した過程を報告する。 大学教育の中で Wikipedia のローカル記事を客観的に記述し、更新することができれば、大学が主体となって地域情報を整備する、地域連携の新たな手法になるのではないかと展望する。	